

99歳の沖縄旅行と旅立ちの映像

Dr.

和

の町医者日記

「生と死」シリーズ⑩



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
 東京医大卒業後、大阪大第二内
 科入局。平成7年、尼崎市で「長
 尾クリニック」を開業。外来診療
 から在宅医療まで「人を診る、
 合診療を目指す。医学博士。近著
 「平穏死・10の条件」「胃ろうは
 いずれもベストセラー。関西国際大学、
 東京医科大学客員教授。56歳。

先週末、某報道番組で99歳の認知症の女性と家族、そしてそれを支える仲間の活動が紹介されました。西宮市のNPO法人「つどい場さくらちやん」は10年以上、認知症介護者を支える活動を行っています。

昨年秋は沖縄への旅行だったので、私も宴会要員として飛び入り参加しました。要介護5の認知症の人が沖縄旅行？と疑問をもった人がいます。

認知症でも最期まで家で普通に暮らせる

もしなければならぬので移動すること人は元気に

なり、認知症が進行しませんでした。99歳の彼女がそう教えてくれました。しかし、彼女は今年1月3日にすぎ焼きを食べた。ビールを飲んだ後、眠るように旅立たれました。

つどい場でのみとりの一部始終はそのまま番組で放映され、大きな反響がありました。

「感動して泣いた」、「手づかみで食べると誤嚥しないんだ」、「こんな映像は初めて」などなど。なかでも「認知症でも家で最期まで普通に暮らせるんだ」という感想が一番多かった。

番組の映像では、女性が呼吸停止してから私が駆けつけて死亡診断書を書くというシーンもありました。

「認知症でも家で最期まで普通に暮らせるんだ」という感想が一番多かった。

医師法第20条によると、主治医が定期的に診ているのにもかかわらず、亡くなった後に家に行き、体表面に異状がないことを確認次第、死亡診断書を書きます。

「在宅医療はよいものだけではない」といふ不安でしょう。実際、死亡から時間が経過して救急車を呼ぶと、自動的に警察が呼ばれて検視になります。

「認知症でも家で最期まで普通に暮らせるんだ」という感想が一番多かった。

「かかりつけ医」がないため検視になるケース(孤独死)も増えています。一方、往診もしてくれるかかりつけ医がいれば、警察とは無縁の平穏死になります。つまり、平穏死と孤独死は紙一重なのです。

特に1人暮らしの方は、イザというときのためにも、普段からの近所付き合いを大切にしてください。(本シリーズは終了)

「学び隊」「見守り隊」「お出かけ隊」をそれぞれ編成し、医療や介護に関する講義、こぞ、どきどき外に出て旅行

「お出かけ隊」をそれぞれ編成し、医療や介護に関する講義、こぞ、どきどき外に出て旅行

「お出かけ隊」をそれぞれ編成し、医療や介護に関する講義、こぞ、どきどき外に出て旅行

らちんぱい